

平成28年度 血液事業への取り組みについて



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

平成29年9月6日（水）
血液事業部会運営委員会

1. 平成28年度の事業概要

献血者



事業所や学校等での協力

- ・献血バス 276台
- ・献血ルーム 151カ所

400mL献血

327万人

成分献血

140万人

200mL献血

16万人

計483万人

血液センター



血液の検査・製造

- ・検査拠点 8カ所
- ・製造拠点 12カ所
- ・供給拠点 103カ所



赤血球製剤

642万本



血漿製剤

315万本



血小板製剤

909万本

計1,866万本



原料血漿

97万リットル

医療機関



血漿分画製剤

製薬メーカー

JB 一般社団法人
日本血液製剤機構
Japan Blood Products Organization

日本製薬株式会社
NIHON PHARMACEUTICAL CO.,LTD.

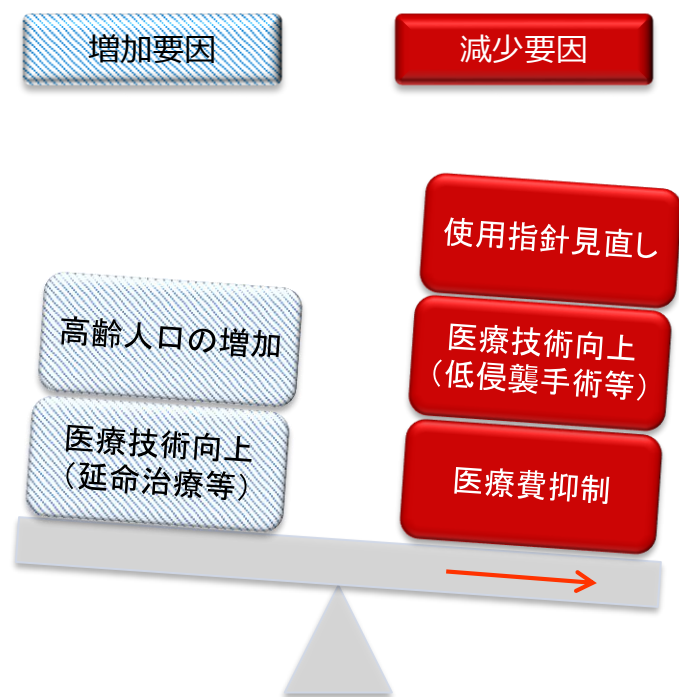
化血研

輸血を必要とする患者さんのために483万人の献血協力をいただきました

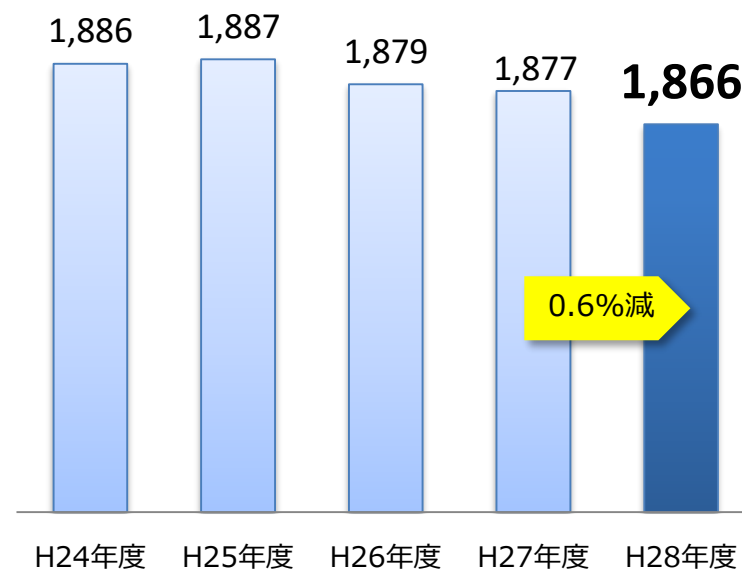
(1) 輸血用血液の需要動向

輸血使用量の多い高齢人口が増加しているが、医療技術の向上、適正使用の推進等により、この数年、漸減傾向にある。

輸血の需要状況



輸血用血液製剤の供給量 (万本)

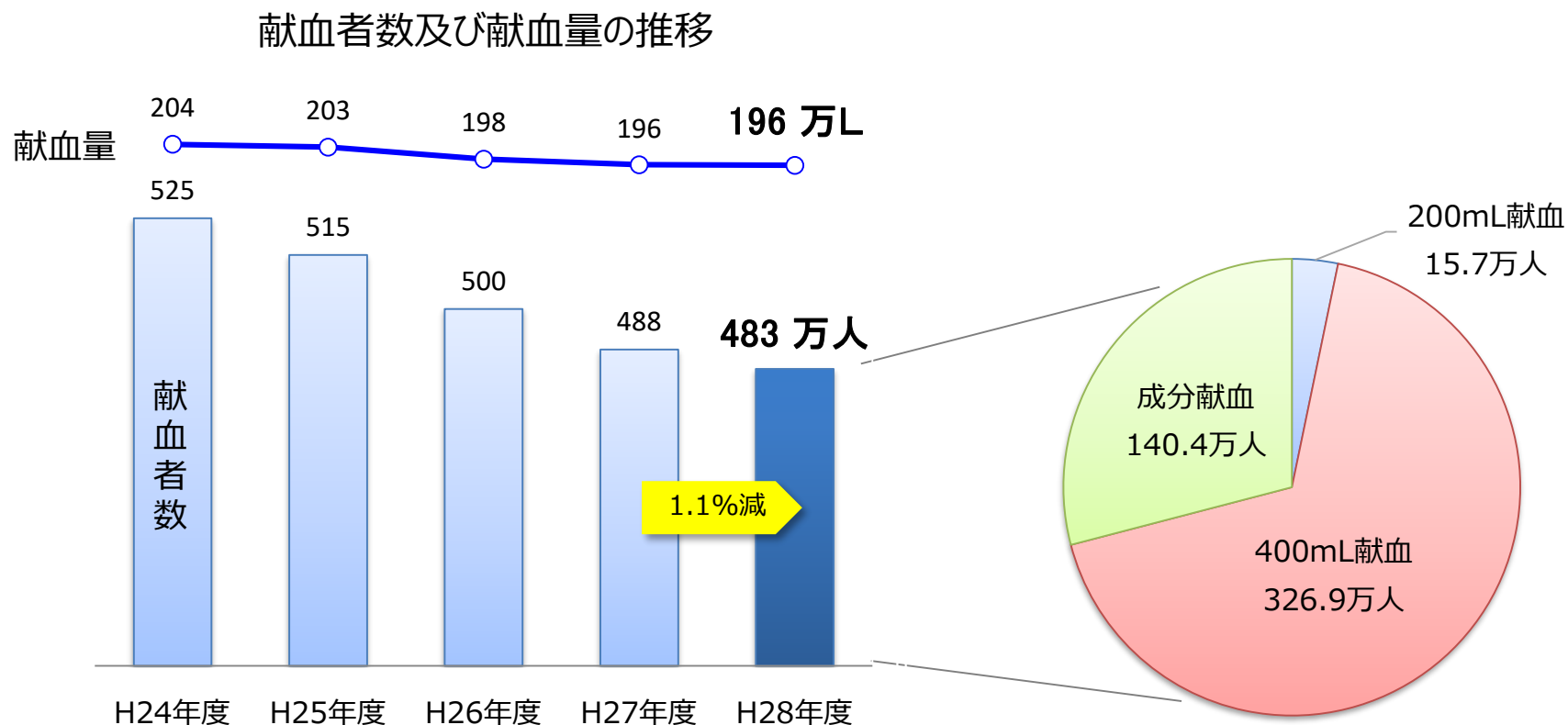


今後も漸減傾向

本数は200mL献血由来製剤の換算数

(2) 献血協力の状況

献血者数は前年から減少しているが、400mL献血、成分献血を中心に、需要に見合う血液量を安定的に確保した。



2. 各施策について

(1) 事業改善の推進

必要な血液量を、少ない献血者と費用で、安定的に確保することに主眼をおいた基盤強化を図ってきた。

取り組み事例



受付・採血部門

- ◆ 400mL献血率の向上
- ◆ 体重別血漿採血量促進
- ◆ 1稼働あたりの献血者数向上

改善



検査・製造部門

- ◆ 血小板成分献血の分割製造の増加
- ◆ 肝機能検査の基準見直し
- ◆ 自動化機器導入や物流の見直しによる業務効率化

改善

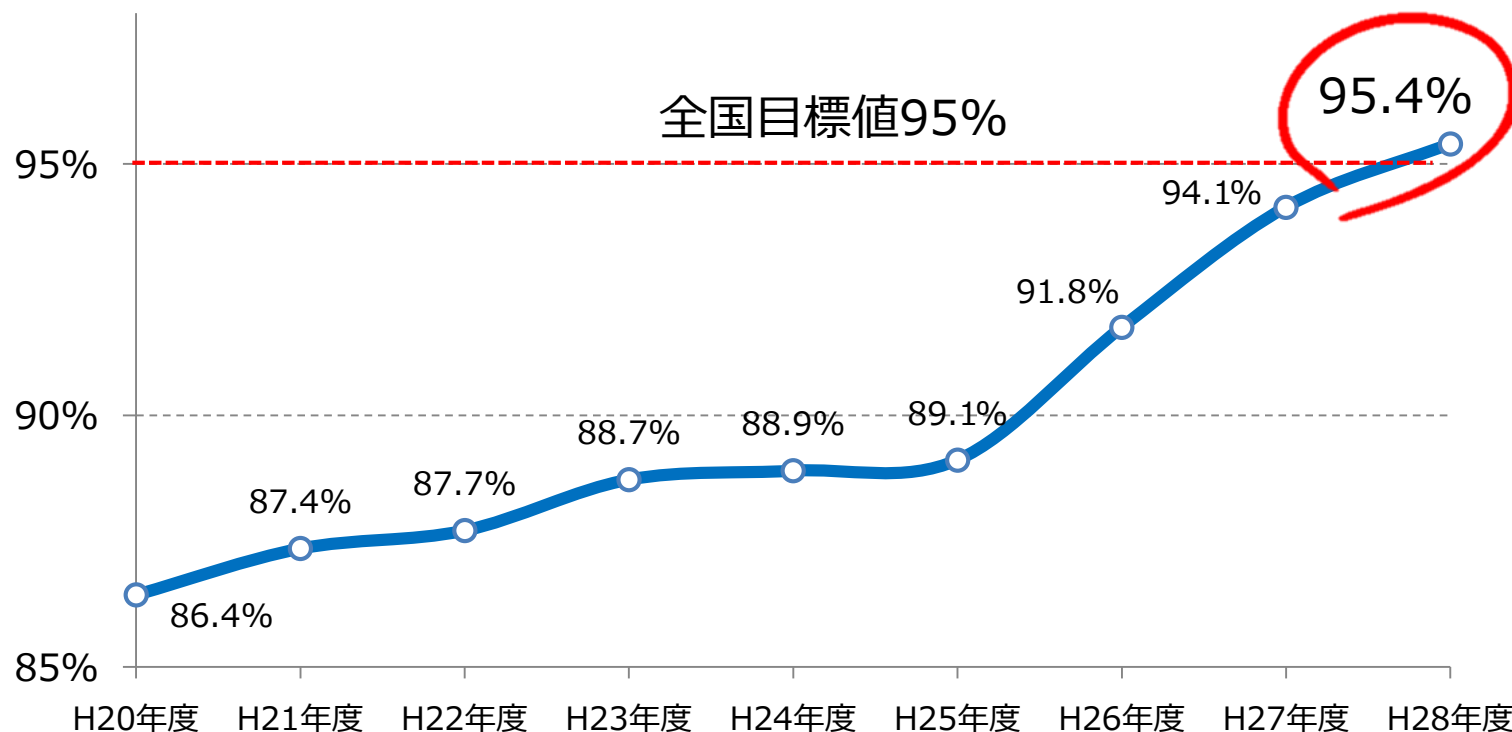
改善の取り組み①

◆ 400mL献血率の向上



医療機関からの受注割合に基づいた全国目標値**95%**を達成

⇒材料費、経費の抑制にも波及

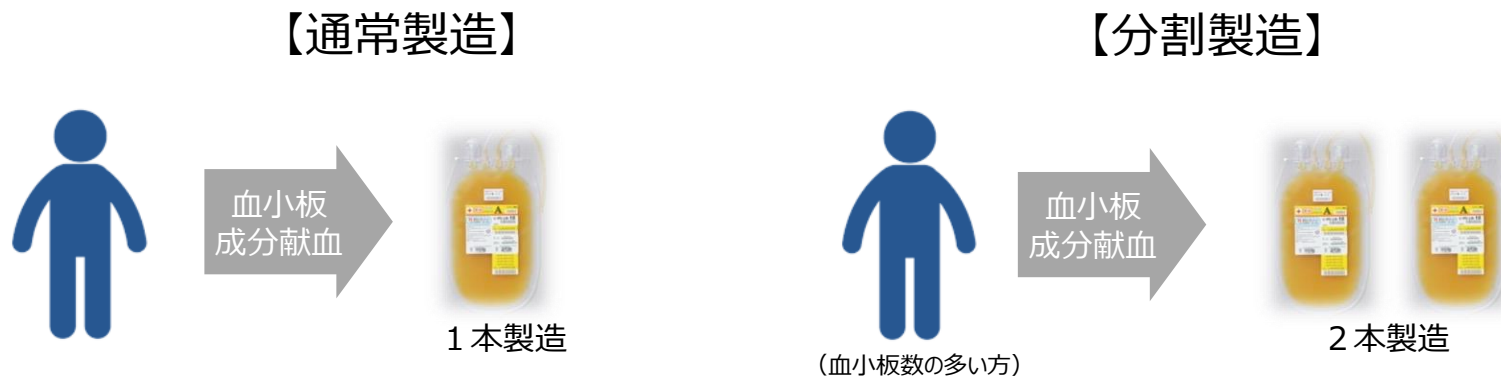


改善の取り組み②

◆ 血小板成分献血の分割製造の増加



- 血小板成分献血1人から、血小板製剤2本を分割製造することで製造コストを抑制(26年度から開始)
- 平成28年度の実績は16万本(前年度比**180%増**)



血小板成分献血の分割用採血本数(平成28年度)

164,057本

(血小板成分献血総数の23.4%)

改善の取り組み③

◆ 肝機能検査の基準見直し



- 血液に対する検査項目のうち、肝機能(ALT)検査の基準値は、他の高感度検査の導入により、変更※しても輸血の安全性に影響ないことが一昨年度の安全技術調査会で確認されたため、平成28年4月から変更
- 従来基準では輸血に使用できなかった**11万本を有効利用**

※ 60IU/L以下を製品→100IU/L以下を製品

基準変更により有効利用できた本数(H28年度)

113,261本
(献血総数の2.4%)

(2) 健全な財政の確立

収益漸減の継続が想定されるため、各種コストの削減を進め、健全な財政基盤づくりを進めてきた。

費目別取り組み事例

経 費

- ◆ 業務委託等、費用全般にわたる内容の見直し
- ◆ 設備、機器の更新時期の見直し

材料費

- ◆ 血小板分割製造促進、肝機能検査基準の見直し
- ◆ 契約交渉による資機材の調達価格の見直し

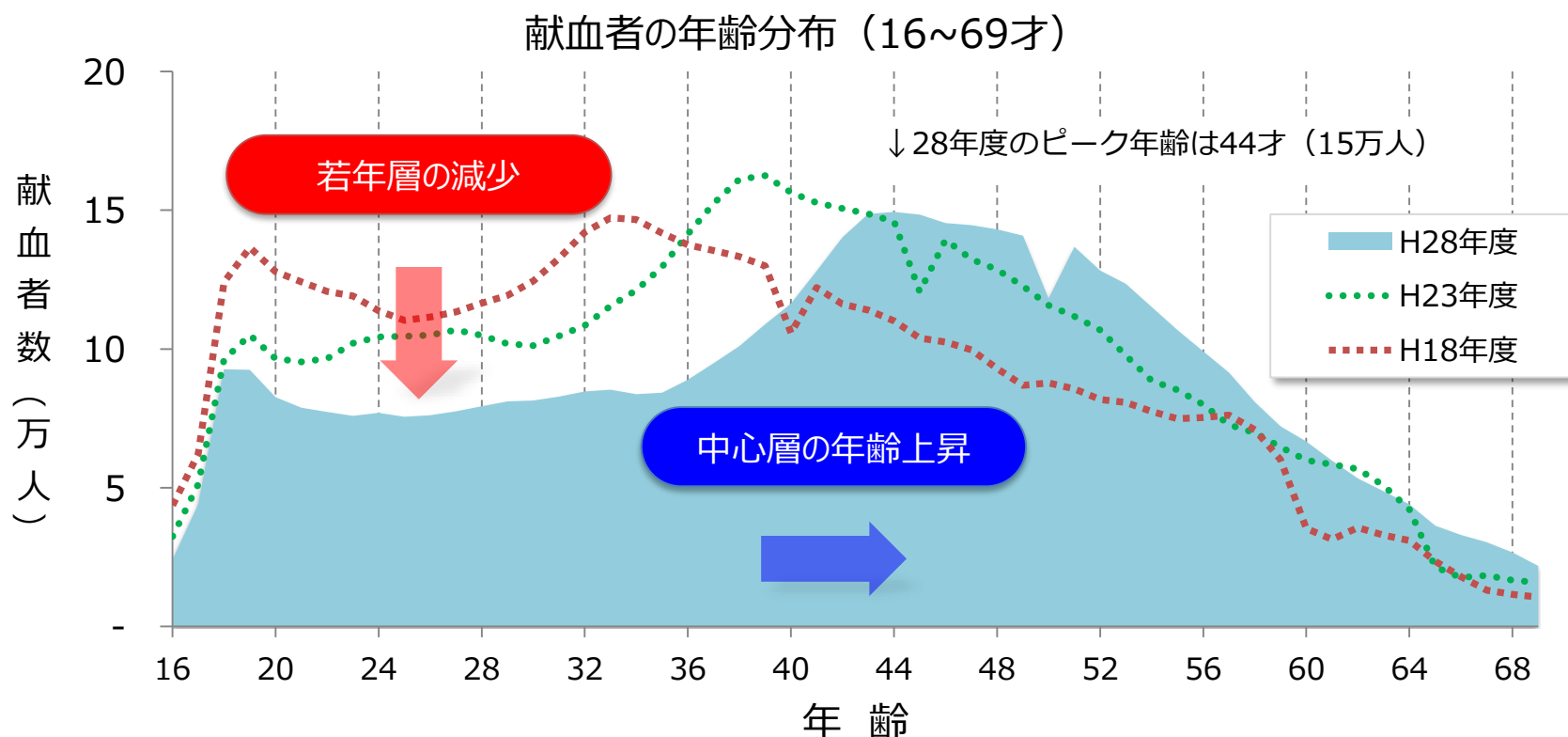
人件費

- ◆ 業務効率化による時間外勤務の低減
- ◆ 組織体制の見直しによる職員数の削減

あらゆる費用の低減

(3) 献血者の安定的確保

人口動態の影響もあり、この10年間で若年層の協力が減少し、中心層の年齢が上昇している。このため将来の協力基盤となる若年層に対する普及啓発に努めてきた。



若年層献血者確保への取り組み

キャンペーン、イベント展開

年代別の取り組み

目標及び
成果



10
代

- ◆ 小・中・高校における献血セミナー
- ◆ 高校献血の推進

20
代

- ◆ 大学、専門学校献血の推進
- ◆ 学生ボランティアによる献血セミナー

30
代

- ◆ 企業における社員研修や社内広報による情報提供の実施

都道府県別に年代別目標数を定め、進捗管理

若年層の献血率向上

(4) 血液製剤の安全性向上

さまざまな安全対策により、輸血による副作用の発生を低減した血液製剤を製造・供給しているが、加えて新たに国内発生が懸念される新興・再興ウイルスへの対策を進めてきた。

平成28年度に行った新興・再興ウイルス対策

ジカウイルス感染症（ジカ熱）

- ・ 蚊を媒介する感染症で、輸血による感染報告（海外）があるため、平成28年7月から献血を制限する条件を追加し、献血者に周知

シャーガス病

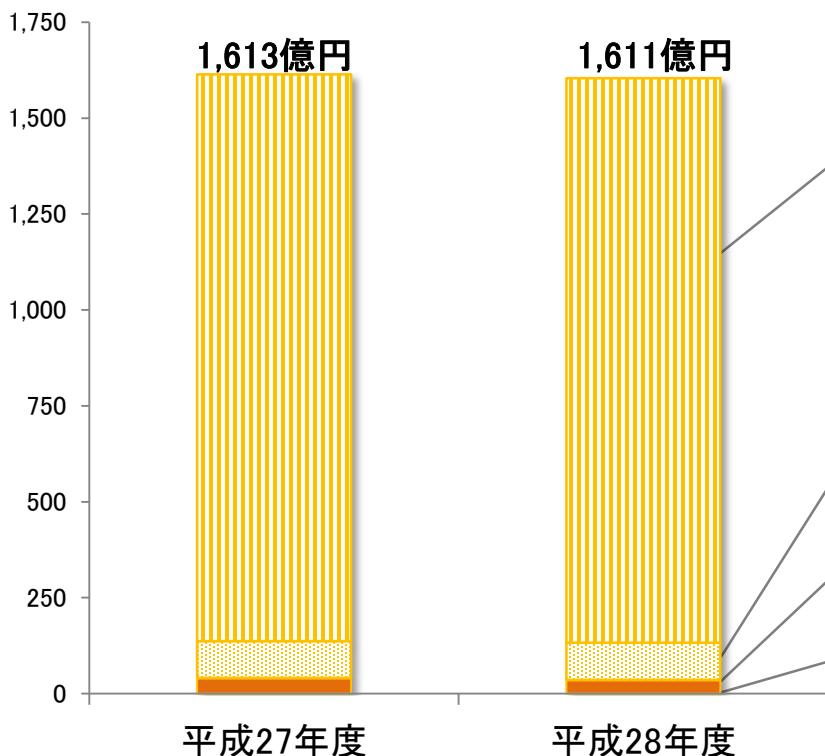
- ・ サシガメ（昆虫）を媒介とする感染症で、輸血による感染報告（海外）があるため、平成28年8月から感染リスクのある血液に抗体検査を導入

3. 血液事業特別会計歳入歳出決算概要

(1) 収益的収入のあらまし

(注) 金額は、表示額未満で切り捨てているため、合計額とは一致しません。

(億円)



輸血用血液製剤供給収益
[1,476億円 → 1,471億円] $\Delta 0.3\%$

原料血漿供給収益
[96億円 → 103億円] 7.3%

その他事業収益 ※1
[1.77億円 → 1.72億円] $\Delta 2.8\%$

事業外収益 ※2
[19億円 → 17億円] $\Delta 10.5\%$

関連事業収益 ※3
[16.6億円 → 16.9億円] 1.8%

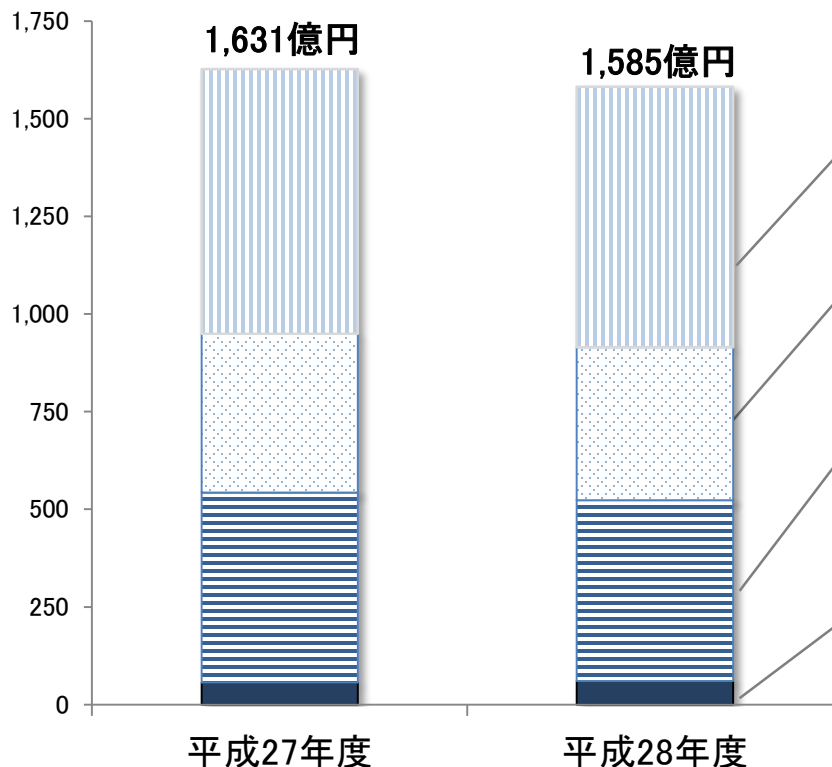
特別利益 ※4
[3.6億円 → 0億円]

	平成27年度		平成28年度	増減額	増減率
収益的収入合計	1,613億円	→	1,611億円	△2億円	△0.1%

※1 血液検査収益など ※2 長期前受補助金等取崩益、受取利息など ※3 補助金収益、臍帯血供給収益など
※4 固定資産売却益など

(2) 収益的支出のあらまし

(億円)



人件費
[677億円 → 666億円] $\Delta 1.6\%$

材料費
[406億円 → 391億円] $\Delta 3.7\%$

経費
[491億円 → 466億円] $\Delta 5.1\%$

事業外費用 ※5
[36億円 → 35億円] $\Delta 2.8\%$
 関連事業費用 ※6
[13億円 → 16億円] 23.1%
 特別損失 ※7
[6億円 → 8億円] 33.3%

	平成27年度		平成28年度	増減額	増減率
収益的支出合計	1,631億円	→	1,585億円	$\Delta 46$ 億円	$\Delta 2.8\%$
収支差引額	$\Delta 17$ 億円	→	25億円	42億円	

※5 退職給付会計変更時差異、支払利息など ※6 臍帯血骨髄関連人件費、材料費、経費など
 ※7 固定資産除却損、その他特別損失など

(3) 収支改善の主要因

収入の減少

△2億円

ア 赤血球製剤の収益減少	△4億円
イ 血漿製剤の収益減少	△3億円
ウ 血小板製剤の収益増加	2億円
エ 原料血漿の収益増加(H27年度91.5万L⇒H28年度97万L)	7億円
オ その他の収入	△4億円
・固定資産売却の減少	

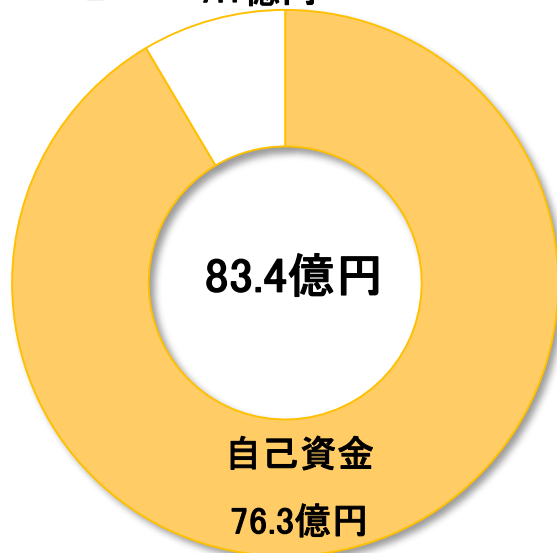
費用削減努力による減少

△46億円

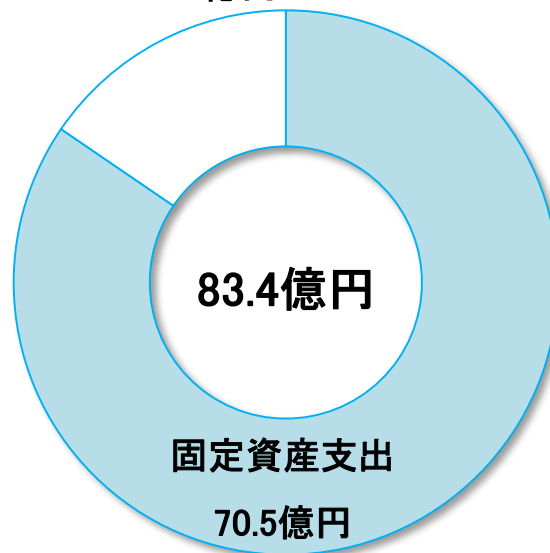
ア 人件費	△11億円
・人員削減及び時間外手当等の削減	
イ 材料費	△15億円
・単価交渉と効率的な採血による削減	
ウ 経費	△25億円
・施設等の計画的な整備による減価償却費、機器等の保守費用、施設等の賃借料等の削減	
エ その他の費用	5億円
・固定資産減損損失の増加	

(4) 資本的収支のあらまし

【収入】 補助金等収入
7.1億円



【支出】 借入金等償還
12.9億円



資本的支出の内訳

内 容	金 額
土地の購入	11.7億円
血液センター、献血ルームの施設整備等	32.4億円
成分採血装置、血液保管庫などの整備	12.7億円
移動採血車、献血運搬車などの車両整備等	7.8億円
血液事業情報システム等	5.9億円
借入金等の償還	12.9億円

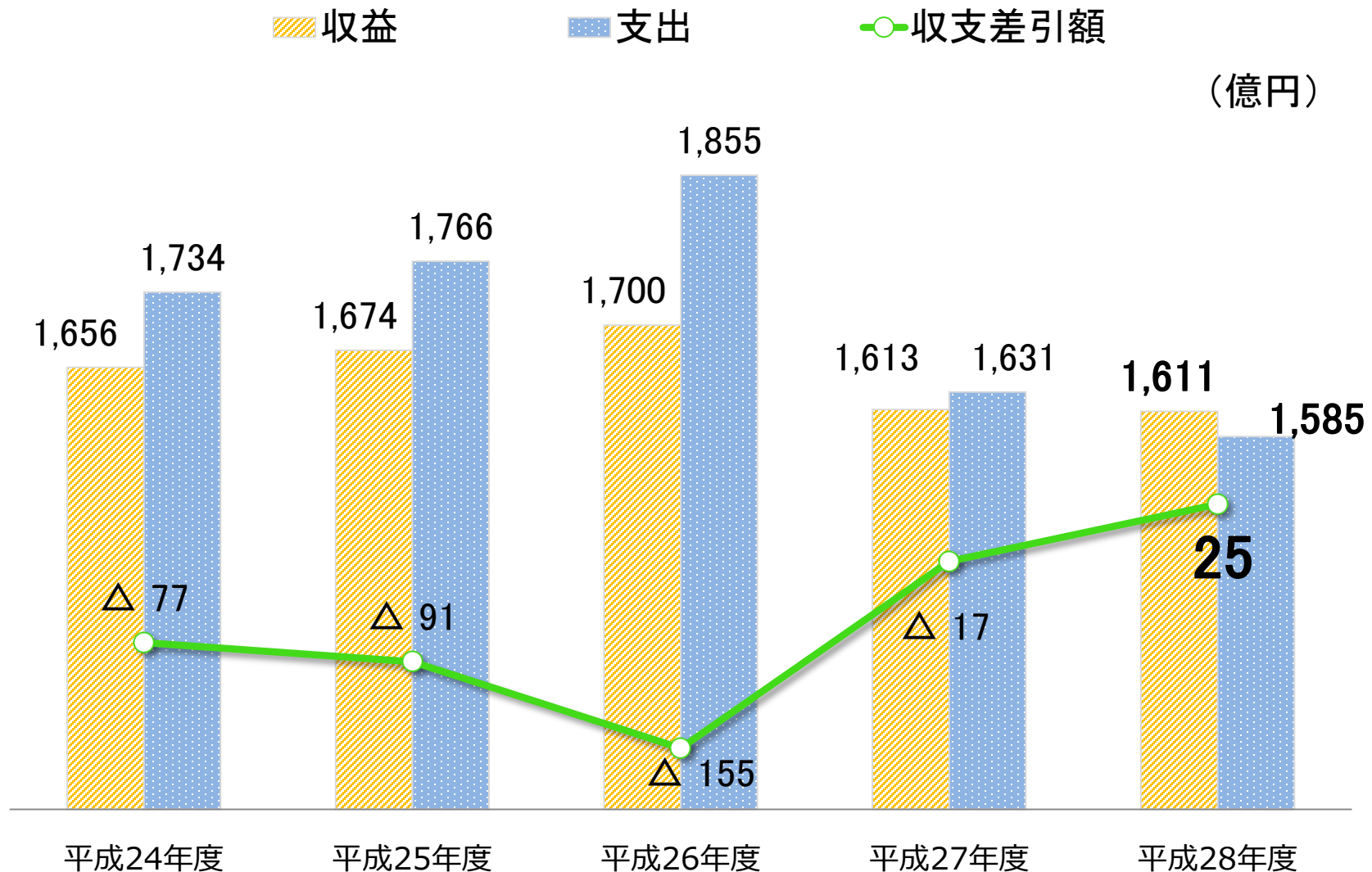


石川県赤十字血液センター



郡山駅前献血ルーム

(5) 収支状況の推移



4. 今後の方向性・課題

項 目	目 標	これまでの取り組み	今後の方向性・課題
事業改善の推進	少ない献血者と費用で必要とする血液量を効率的に確保	400mL献血率等の事業目標値を目指した採血効率向上	- 改善活動の風土化 - あらゆる業務の棚卸と見直し
健全な財政の確立	血液需要の漸減(収益減少)に対応できる財政基盤構築	- 各種費用の削減 - 新たな施設整備の延期・凍結	長期的ビジョンに基づく施設設備等の整備
献血者の安定的確保	将来のための若年層の献血協力基盤構築	- 対象年齢にあわせた普及啓発 - 国の定める献血率(目標値※)は未達	- 献血者管理システムの導入 - 将来の血液需要推計の見直し
血液製剤の安全性向上	輸血による副作用の低減・軽減	- 新興・再興ウイルスへの対策 - 新規製剤(洗浄血小板)の供給開始	- 新規製剤(置換血小板)の導入 - 新たな検査項目追加の検討